

難病の子のため歩いた笑った

北杜のキャンプ場支援 250人参加

難病や障害のある子どもたちのためのキャンプ場「あおぞら共和国」(北杜市白州町鳥原)を支援しようとして、チャリティー企画「新緑ウォーク2017」が22日、地元であった。約250人が最寄り駅からキャンプ場まで12キロのコースを元気に歩いた。記者も同行し、道すがら参加者らに思いを尋ねた。

出発地点のJR日野春駅前。今年、都内から甲府市に住民票を移したという甲府一高OBの石原光博さん(65)は仲間と言った。

「俺は強行遠足で3位だった。65年生きて、それだけが自慢」

企画は、100名強行遠足で知られる一高の卒業生が中心の「甲府一高あおぞら会」の主催だ。会は2012年、同じOBの小口弘毅さん(65)が発案した。

小口さんは北里大学の病院で新生

児集中治療室に勤務した後、相模原市で小児科クリニックを開業。建設中のおおぞら共和国のプロジェクトにも関わっており、OBらに支援グループづくりを呼びかけた。

キャンプ場は、認定NPO法人「難病のこども支援全国ネットワーク」(東京)が11年から取り組み始めた。寄付された土地約1万平方メートルに完成した宿泊棟四つは、車いすも

入る広いトイレがあるものも。さらに2棟を造る予定。

先回りしたり、戻ったり。この日、小口さんは折りたたみ自転車に乗り、参加者の誘導役を務めた。

「難病の子らとその保護者が気兼ねなく宿泊できる施設はあまりない。山梨にあることをもっと知ってもらえば、子どもに優しい場所と移住する人もいるだろう」

相模原市の山本理恵子さん(44)は、小口さんのクリニックに通うダウン症の長男峰弓君(4)と参加した。「温泉で気兼ねなく風呂に入るというのができない。気にしてもしようがないけど、気にする」

日野春駅からの坂道はカーブも多く、車が急に目の前に現れ、怖い。2人乗りのベビーカーを押していた県立大看護学部の学生たちは、道路のちよつとしたくぼみに車輪を取られて大変そう。

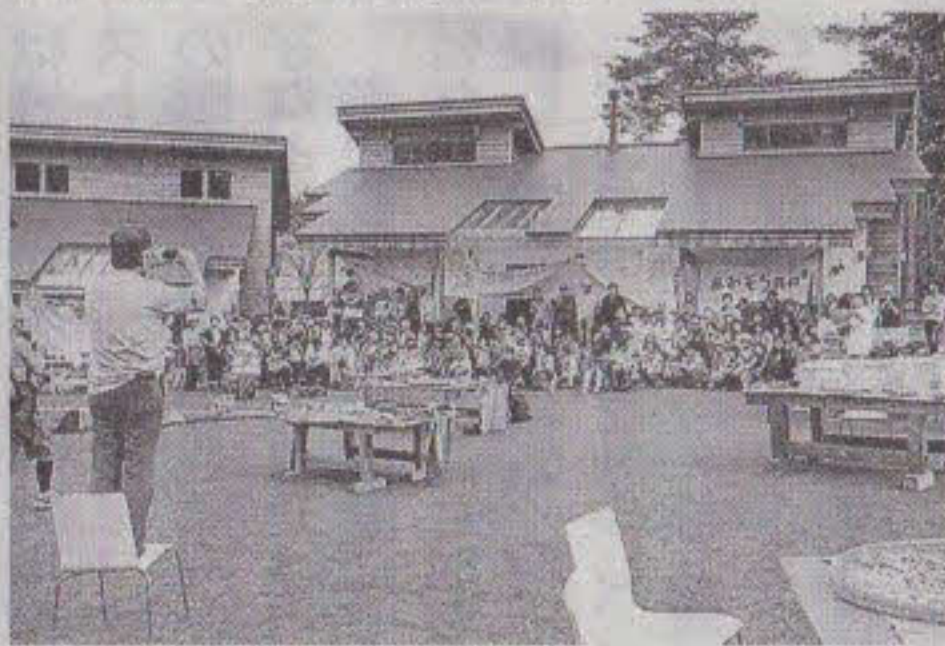
それでも甲州街道の旧道に入ると、自然が迎えてくれた。芽吹いた緑、せせらぎの音、鳥のさえずり。

ネットワーク会長の小林信秋さん(69)も言った。「この時期、ここを歩くのは本当に気持ちいい」

あおぞら会の会長を務める露木和雄さん(66)は「今後、建物が完成しても維持管理が大変。草刈りも必要だろう。会員を増やしてサポートしていきたい」と話した。

1人1千円の参加費は、経費を除く全額が支援のため寄付される。

(渡辺嘉三)



①ベビーカーを押しながら歩く県立大看護学部の学生
②北杜市内③あおぞら共和国に着いて記念写真を撮った④北杜市白州町鳥原